

氏名	松村祥恵
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第146号
学位授与年月日	平成24年3月9日
学位論文題目	壮年期糖尿病患者の腎機能と塩味知覚の関連

## 論文内容要旨

※整理番号	151	(ふりがな) 氏名	まつむらよしえ 松村 祥恵
修士論文題目	壮年期糖尿病患者の腎機能と塩味知覚の関連		
<p><b>【目的】</b></p> <p>1. 糖尿病外来通院中の壮年期糖尿病患者の塩味知覚低下の現状把握  2. 糖尿病外来通院中の壮年期糖尿病患者の腎機能と塩味知覚低下の関連を、性・年齢・血糖管理状況等を考慮して検討すること</p> <p><b>【方法】</b> A 大学医学部附属病院糖尿病外来の登録糖尿病患者のうち、2011年4月から9月に外来通院した40～64歳628名のうち、除外基準（口腔疾患、主治医の許可が得られない）に該当する117名を除いた511名を本調査の対象とした。塩味知覚検査は食塩含有濾紙ソルセイブ®で測定した。eGFRは<math>194 \times \text{Cr}^{-1.154} \times \text{Age}^{-0.203}</math>（女性<math>\times 0.746</math>）の推算式を使用した。eGFR水準（<math>\geq 90</math>、80-89、70-79、60-69、<math>&lt; 60</math>：<math>\geq 90</math>を参照水準）を独立変数、塩味知覚を従属変数とし、交絡因子（性、年齢、糖尿病型、HbA1c、神経障害、腎症、高血圧、インスリン注射、味覚障害薬剤、喫煙、飲酒、義歯の有無）を調整した多重ロジスティック回帰分析により、eGFR各水準の塩味知覚低下有所見のオッズ比および95%信頼区間を算出した。</p> <p><b>【結果】</b> 511名に調査を依頼し416名（応諾率81.4%）の同意が得られた。塩味知覚検査日に未受診の7名、がん患者39名、eGFR測定結果のない5名、塩味のない濃度を塩辛いと答えた1名を除く364名を分析対象とした（男性222名、女性142名）。結果、塩味知覚低下者は133名で分析対象者の36.5%（男性43.7%、女性25.4%）であった。男性の塩味知覚低下の保有が多かった。eGFR各水準の塩味知覚低下者は、<math>90 \geq</math>：群83名中18名（21.6%）、80-89群84名中36（42.8%）、70-79群71名中29名（40.8%）、60-69群66名中29名（43.9%）、<math>&lt; 60</math>群60名中21名（35.0%）であった。eGFR<math>90 \geq</math>を参照水準とした各eGFRの塩味知覚低下者の多変量調整後のオッズ比および95%信頼区間は80-89群3.0（1.4-6.1）、70-79群2.4（1.1-5.3）、60-69群3.0（1.3-6.6）、<math>&lt; 60</math>群1.9（0.8-4.3）であった。</p> <p><b>【考察】</b> 本研究において、糖尿病患者の塩味知覚低下の保有は、一般集団よりも多かった。また、男性は塩味知覚低下の保有が多かった。<math>\geq 90</math>群と比較して、eGFR60～89では、塩味知覚低下の有所見が約2～3倍高いことが示された。塩味知覚を減塩指導に用いることは高血圧患者、透析患者で減塩の効果があるとされている。早期の腎機能低下者に対しても減塩困難であれば塩味知覚低下の有無の把握とともに、それに伴う指導を行う必要性が示唆された。</p> <p><b>【総括】</b> 一大学病院糖尿病外来通院中の40～64歳の糖尿病患者を対象に塩味知覚低下の有所見およびeGFRによる腎機能と塩味知覚低下の関連を検討したところ、対象者の36.5%に塩味知覚低下を認めた。また、腎機能と塩味知覚低下との関連では、eGFRが60～89の集団では<math>\geq 90</math>群と比較して塩味知覚低下者の有所見が2～3倍であったが、<math>&lt; 60</math>の群では参照集団との有意な相違は認めなかった。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)  
2. ※印の欄には記入しないこと。